

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第三部

第十七章

Grand Duke of Aurea

峯村 明

リ・コンストラクション

[登場人物](#)

[17・Grand Duke of Aurea](#)

[189.](#)

[190.](#)

[191.](#)

[192.](#)

[193.](#)

[194.](#)

[195.](#)

[あとがき](#)

[奥付](#)

登場人物

桧山 健	27歳の実業家
A. V. ラウレンスⅢ	H&L財団代表
アランデル・アウレア	ポルタアウレア公国の現大公
エドミール	〃 皇太子

17・Grand Duke of Aurea

189.

「おい！」

「——え？」

「....."了解"でいいんだろうな！？」

「.....なにが？」

エドミールは不機嫌なため息をついて椅子の背もたれに背中をあずけた。ラウレンス氏は エドミールと健の間に入らぬよう、脇に引いてそれとなく様子をみている。

《ミッドランタ》のダイニングテーブルにはさわやかな春の朝日が差し込んでいる。朝日はさわやかだが、みな寝不足だった。昨夜からほとんど寝ていない。満月の下で翼竜にさらわれた健の帰りを待っていたからだ。あわよくば、次に翼竜に乗るのは自分だと思ってもいた。

健を待っていたのではなくて、むしろ翼竜を待って空を眺めていたのだったが、明け方、健は歩いて帰って来た。

期待して待っていた方は不機嫌になり、「昨夜はメキシコにいて時差ボケなんだ」などという説明は真(ま)に受けもらえなかった。

健にしてみれば現地滞在が五時間、往復の移動時間.....遊覧飛行.....が二時間、帰ってきたら七時間経ってる、いちおう辻褄は合ってるけど、アデレードとメキシコシティとの時差十八時間はどうなるんだろう云々、なんだかよくわからない"時差ボケ"は本当だったし、頭の中を整理したくて一人になりたかったから、エドミールのような存在の濃い人物は避けたいところだったが、

「昨日はラウレンス先生に会う約束もあったが、きみに会わなければならなかった。だからくにから飛んできたのだ！！」とまくし立てられれば邪陰にもできない。

「オレに？ 何の用？」

「だから——」

こんなやり取りを三回も繰り返せば、いつもはほとけさまのように余裕のあるエドミールもさすがに鬼の形相になる。そして冒頭へとループしていく。

「だから！！ うちの親父がきみに会いたいと言ってるんだ！！ 昨夜からアデレード空港にチャーター機を待たせてる！！ 行くぞ！！ しかしその前に、そのネコの毛だらけの服装をなんとかしたまえ！！」

190.

「おたくの親父というと、ポルタアウレア大公？」

「きみに親父と言われる筋合いはない」

言いあっているところへ真が挨拶にきた。「みなさんおはようございます。ぼくはようちえんへ行ってきます」

「おはよう、真。幼稚園なんか休んでしまいなさい。おじさんといっしょに飛行機に乗ろう」

「そうはいくか。幼稚園年長は義務教育なんだ。ああ義務教育はつらい」

眺めているラウレンス氏は、「よかったよかった」と嬉しそうだ。「あなたたちの仲がよさそうで」

ポルタアウレアへはラウレンス氏も同行した。彼も呼ばれているのだった。

*

「昨夜、メキシコシティにいたというのは本当なんですか、健」

「本当ですよ。飛行機だと二十時間はかかる距離だけど、イリチヤはそういう物理をまったく無視してしまう。ほとんど瞬間移動です」エドミールが席を外しているのを確かめて小声で続ける。

（チャーター機なんか目じゃない）

ラウレンス氏は笑った。「瞬間移動とはなんとも便利ですね。でも彼は霊体なのでしょう？ エドミールは期待してましたが、誰でも乗れるわけじゃなさそうだ。たとえば、波長が合うとか、そういう条件つきになるのでは？」

「ええ、たぶん。ところで、先生は、アンベレオ・カレンダーというのをご存知ですか」

「アンベレオ・カレンダー？なんですかそれ」

そこへエドミールが三人分のコーヒーを運んで戻ってきた。

「それはマヤやアステカのカレンダーの原形らしい」

イリチヤから得た情報を健は披露した。ラウレンス氏とエドミール氏は引き込まれるように聴き入った。

話が済むと、三人は黙って、仮眠をとった。アデレードからポルタアウレアまで、乗り継ぎや待ち時間をカットしても十数時間はかかる。翼竜のようにはいかないのだった。

191.

ヒューダーは黄金門の皇帝と面識はない。だが、そのひとが部屋に現れた瞬間、このひとがそうだ、と直観した。眼はおだやかで、得も言われぬ風格がある。現在は人口五千の小国のあるじだが、彼の魂はキングオブキング、王の中の王という立場を経験していた。

それにしても、あまり会いたい相手じゃないというのが健の思いである。健の母ソフィアはこの男の妹。兄は妹の出奔に激怒し、相手の男共々、決して許そうとしなかったという。彼の目に自分はどうか映っているのか。好印象だけはあり得ないと思う。

(どう思われようと、相手の勝手だが)

ただ、なぜ呼び出されたのかは気になった。そして、なぜかラウレンス氏も同席していた。

(オレ個人に用があるわけじゃない、ということか。だが、ちょうどよかった、この人ならアンベレオ・カレンダーについてなにか知っているかもしれないぞ)

「アランデル・アウレアである」と彼は名乗った。深く威厳のある声で。ラウレンス氏とは目顔で挨拶をかわす。顔見知りのようだ。

「そなたがケン・ヒヤマどのでよろしいか」

呼びかけられた健はうなずいたが、敬称付きとは。

「おかけください。さっそくであるが、そなたに見てもらいたいものがある」

アウレア大公アランデルはふたりに椅子を勧め、侍従を呼んだ。侍従は何か平たい物を白い手袋の両手で持ってきて、うやうやしくテーブルに置いた。美しい織りの布が張られている。開くと、中に写真。それも——婚礼の写真ではないか。

「これは宮殿の大広間では」と、大公の横からのぞきこんだエドミール。

健も好奇心にかられ、よくよく写真に見入って、え、と驚いた。黒い洋装の新郎は桧山善人？ 養父？ いやそんなわけではない。白いドレスの新婦は養母の喜和子の顔ではない。ということは——「まさか——桧山正太郎！？」

「その通り。よくご存知である」

「やはり曾祖父！ パスポートの写真を見たことがあるので。しかし、なぜこのような写真をお持ちなのですか！？」

「なぜかといえば、正太郎と絹子はここ、ポルタアウレアの地で結婚式を挙げたからだよ」

192.

新郎新婦の脇には盛装した大人たちのほかに、花かごを手にした少年少女がいる。まるで天使のようなかわいらしさ。大人もこどももみな幸せそうないい表情をしている。

「セーラム大公夫妻、男の子はミラディン、私の父だ。女の子はミラディンの妹のミリツァ。祖父のセーラムは子だくさんで、こどもたちの間でこの役割をめぐってケンカになったそうだ」

「ふむ、アウレア家はやはり美形ぞろいだ」とエドミール氏もまんざらでもなさそうである。「して、父上、この方たちはなぜ宮殿で結婚式を？」

「どこから話したもののか。そう……正太郎は、先々代大公・セーラムの家庭教師だったのだが……その前に、セーラムはA.V.ラウレンス教授の教え子だったのだ。そうでしたな、ラウレンス先生？」

話をふられたラウレンス氏はうなずき、健は混乱した。曾祖父がポルタアウレアと関係があったとは初耳だった。そのうえラウレンス氏の先祖が絡んでいるとは。

「かれこれ百年前のこと。セーラムはオーストラリアへ向かう船旅の途中で偶然、ラウレンス教授と再会した。教授は日本からベルギーへ帰国する途中で、セーラムはひとりの日本人、つまり正太郎を紹介された。

正太郎は訳あって帰る当てもなければ行先もない身だった。船から身を投げようとしたところをラウレンス教授に止められ、そこへセーラムが通りかかったわけだ。

教授の紹介ということもあり、正太郎は公国使節団の随員として採用され、オーストラリアへ入国した。彼は数学の教師でとくに経済に明るく、セーラムの教師という身分のまま数年の間ポルタアウレア大使館で働いたのだが……彼は受け取った報酬を、なんとかして本国の両親に渡したいと考えていた。

そこでセーラムの部下が骨を折った。つまり日本へ現金を運んだのだ。時節柄、相当面倒な仕事だったにもかかわらず、部下は日本へ行き、正太郎の両親に会った。ところが、それがのちに正太郎の夫人となった絹子の目にとまった。

絹子は正太郎の幼なじみでかつては結婚の約束をしていたが、ある時、正太郎が不貞行為を働いているという噂を彼女の父母が聞いた。絹子は真実を確かめたかったが、彼女の父母は周囲の耳目を気にし、噂そのものを嫌悪し、二人の仲を裂いたのだという。セーラムの部下が絹子本人から聞いた話だ。

正太郎の両親の耳にも真偽ないまぜのさまざまな噂話が入っていて、息子がうら若い娘を傷つけたのだという負い目もあり、絹子の父母の怒り、蔑みを知り、絹子本人に会おうとはしなかったらしい。

結果、絹子は心を病み、正太郎は己を責め、出奔するに至ったのだった。

しかし絹子は諦めきれず。本当のことを知りたいのだという彼女の強い意向を知ったセーラムの部下は、彼女の手紙を預かり、橋渡しをしたのだ」

「オレは常々不思議に思っていたのですが、曾祖父がオーストラリアへわたったのは、オーストラリアが国策として東洋人を拒んでいた時代だった。人種差別も公然とあった時代だ。写真を見ればわかるように、彼はいかにも東洋人の風貌をしている。なのになぜ、そんな土地に住もうと思ったのでしょうか。

お話からすれば、ポルタアウレアに住むこともできたのではないのでしょうか」

「それはな、ケン・ヒヤマ、事情がある」

「事情——？」

「彼の言葉を借りるなら、『自分を拾って豪州へいざなってもらった、それだけで筆舌に尽くしがたい恩である。そのうえ働かせてもらい、今後どう恩に報いればよいものやら、想像もつかない』と、セーラムへの手紙にある。

ある時期まで、正太郎自身もセーラムも、ポルタアウレアにて永住することを考えていた。が、セーラムの側の事情によってそれができなくなった。

セーラムは——正太郎との友情のしるしに、彼と絹子とを招き、結婚式をプレゼントしたのだよ」

先々代大公セーラムと曾祖父正太郎との間には強い結びつきがあったらしい。しかし、いくら友人とはいえ、正太郎と絹子との縁を海を越えて結び、結婚式を挙げさせるなどと、そこまで骨を折れるものなのか……健は絶句した。

ポルタアウレア先々代大公から受けた信じられないような厚意は、果たして本当なのだろうか。本当に友情からなのか。

健が受け継いだ桧山家の遺品のなかにはポルタのポの字もなかったのだ。

「どうやら信じられないようだ」

「ええ、失礼ながら、信じられません」信じられないというより、さっぱり話が見えないのだ。

健の返答に気を悪くしたのか、アランデルはテーブル上で組んだ自分の指を、黙ったまましばらく見つめていた。

「結婚식을最後に、セーラムは正太郎との関わりを絶った。

亡くなる前の年、私は父と一緒にセーラムの枕辺に呼ばれた。祖父はこの写真を手に、『生涯でただ一人、無条件に心を許せた友だ』と言った。『それ以上でもそれ以下でもない。私の友だ』と。

私はその時十七だった。……この時すでに兄がふたり、友人が運転する車の事故で亡くなっていた。小国ながら有形無形の権謀術数はれっきと存在するのだ。大公家という立場の人間に心を許せる友などあり得るのかと疑ったよ。

私はよほど疑わしい顔をしていたのだろう。そうだケン・ヒヤマ。そなた同様、私も彼らの関係が信じられなかった。

祖父は私を見てしっかりした口調で言った。『あり得るのだ。アランデル』。

祖父は言った。『たとえ、アウレア大公セーラム死去のニュースが彼の耳に入っても、彼は何もしないだろうし、何も言って来ないだろう。』

しかし息子よ、孫よ。もし彼の身に、それとも彼の家族になにごとかあったなら、大公家ではなく、私人として、よいか、あくまで私人として、惜しみなく心をかけてやってほしい。私が何もしないなどという約束はしていない』

祖父と正太郎の交流が絶たれ、その後正太郎がどう生きたのか、こちらではまったくわからないのだが……」

と、大公アランデルはラウレンス氏に視線を投げ、ラウレンス氏はそれを受けた。

「当時、ブリスベンにラウレンスの友人がいました。地質学者で、ひじょうに需要の高い仕事をしていた。オーストラリアは古い大陸なので、じつに様々な資源が埋まっている。開発のために政府はたくさんの学者を雇っていた。正太郎氏は政府お抱えの地質学者の助手となったのです。数学の知識はどこへ行っても使えますからね。それと、大公閣下、彼は数学の教師だったのではありません。ただのビジネスマンでした」

「ふふむ」と大公はほほえんだ。「細かいことは、どうでもよろしい」

「恐れ入ります。そんなわけで、地質学者と一緒に政府の下で働いた正太郎は、オーストラリア永住の認可を受けてブリスベンを去った。妻と共に自力で生きたい、それが彼の希望だったので」

健はまじまじとラウレンス氏を見た。曾祖父の人生の陰に、この人のご先祖がいたとは。遺品のなかにはラウレンスのラの字もなかったのだ。物質的遺品だけでは、人の人生はわからない。

だが、水面下では桧山はラウレンスと関わっていた。H&L創設がその証拠だ。そのことをラウレンス氏に問い質したいところだが……

「アウレアと桧山の関係が疎遠に、いや、絶たれ、長い月日が流れた。互いの代も変わった。私はこの写真を受け継いでいたから桧山とのかつての関係を知っていたが……ケン・ヒヤマ、そなたの曾祖父はポルタアウレアに住むことはなかった。ある事情、ある種のトラブルによって。それは話すと長くなるゆえ、あとにまわそう。

今は君自身とアウレアとの関係だ。

私と妹のソフィアとは、三十も年が離れている。セーラムもその子ミラディンも子でくさんで、私には十五人もの兄弟姉妹がいた。それが次々と亡くなり、ついには私と末のソフィアだけになった。若い娘にはこれは重圧だっただろう。責任ばかりが増えるわけだから。わたし自身、三男で、まさか大公を継ぐことになるとは想像もしていず、自身のことで手いっぱいだった。ソフィアは十五人兄弟の末子ということもあり、うちと桧山の関係を知らされていなかった。彼女の恋の相手がコウイチ・ヒヤマだと、正太郎の孫だと、もし、ひとこと相談してくれていたら、私は反対などしなかったものを！ 祖父の遺言通り、むしろ後押しすべきだったのだ！ あろうことか、この私がソフィアを断崖へ追い詰め、絶壁から突き落としたようなものだ。悔やんでも悔やみきれぬ。——バカなやつだ——私も、ソフィアも」

大公の自責は豪奢な客間を重く支配した。

だが、待てよ、と健は思う。現大公の心臓疾患、コウイチ-ソフィア夫妻の死について、ひろがなにか言っていたような気がする……

195.

長い沈黙ののち、アランデルは思い切ったように顔をあげて言った。

「セーラムと正太郎が友情で結ばれながら縁を切らねばならなかったわけを聴いてほしい。それはそなたら三名にそれぞれ関わりのあることだ。もうしばらく、つきあってもらいたい」

「父上」、とエドミール。「私にも、ですか？」

「うむ。そなたにも、だ。みな、心して聴いてほしい。それは——地震から始まった。先々代大公セーラムの代に起こった地震は、ポルタアウレアの激震だったのだ」

17・「Grand Duke of Aurea」

18・「Gold standard」へ続く

あとがき

桧山正太郎氏は第一部第一章にて、なにもかも捨てて単身オーストラリアへ渡ったはず、なのに、第二部第六章ではアデレード・ヒルズで絹子さんと暮らしていたことになってます。この辺の事情をいつどうやって語ろうか、悩みのタネのひとつでしたが、第三部でようやく片がつきました。

もうひとつ、健の両親の事情というのがありまして、ソフィアさんは旅行先で姿を消してしまったので、事情など誰が知ってる？

それがですねえ、思いがけないところから明らかになります。でもそこへ行く前に、この人があぁなって、あの人がこうなって、あれもこれも、いろいろ語らにやなりません。

今、十七章目だけど、次か、その次あたりでひと区切りになりそう。イメージは次々と沸いてくるわ、調べなきゃならんことはでてくるわ、脳内混線状態ですわ。

前回の公開はほんの十日前なのに…ものすごく日が(何ヶ月も)経ったような気がしてしかたがない。時間の感覚もおかしいです。

2025年6月11日 記

奥付

リ・コンストラクション

第十七章 Grand Duke of Aurea

2025年 6月22日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[写真AC](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社